

E・トッド著「デモクラシー以後 - 協調的『保護主義』の提唱」藤原書店 2009年6月30日刊を読む

協調的『保護主義』とは

1. (1) 保護主義の目標とは根本的に、共同体的優先区域の外に位置する国々からの輸入を撥ねつけることではなく、給与の再上昇の条件を作りだすことである。
 - (2) 国境が開いている限りは、給与は下がり、内需は縮小せざるを得ない。
 - (3) 非先進国の非常に低い賃金の圧力が止まるなら、ヨーロッパの所得は、まず個人所得が、次いで国家の所得も、再び上昇することができる。
 - (4) 所得の上昇は、ヨーロッパ規模での内需の振興を伴い、内需振興は輸入の振興をもたらすのである。
 - (5) 外需の追求、際限のない給与の縮小、それが生産コストを低下させ、その結果、内需が低下し、外需の追求につながる、等々という、現実の悪夢から抜け出すことが肝心なのだ。
2. (1) ヨーロッパ経済のこうした方向転換は、大量の計量経済学的作業とヨーロッパ規模の研究所の設立を要求するだろうが、これらの研究所には、金融システムとあまりにも明白な繋がりを持つ経済学者は採用されないようにしなければならない。
 - (2) それは、一世代にわたる事業となるであろう。
 - (3) 専門技術的な異論は多々あるだろうが、どれもまともに相手にする必要はない。中国は、ドイツの設備財なしに済ますことはできないし、
 - (4) エアバスや原子力発電所のことを考えるなら、フランスの設備材なしに済ますことさえできない。日本もしくはアメリカ合衆国への、独占的な技術的依存状態に陥るのに甘んじるわけにはいかないからである。
 - (5) ヨーロッパが毅然とした姿勢を示すなら、中国はいかなる報復手段も持たないであろう。
3. (1) 真の困難は、イデオロギー的、社会学的、心理学的なものである。
 - (2) 主要な困難は、現在のヨーロッパの個人が集団的に考え、行動することができないという構造的無力性にあり、これは、まさに世紀病と言うべきであろう。

(3)自由貿易の優勢が実現したのは、結局は、経済学者の影響の所為であるよりは、人々の行動の「ナルシスト化」の所為なのである。

(4)保護主義が技術的には困難なものではないとしても、その実現の条件の中には、ナルシスト的な心理的姿勢を変えるという前提が含まれる。

(5)個人の短期的な利益を自覚的に乗り越えることが要求されるのである。

(6)これは、上から1%の超富裕階層においても、全住民の3分の1の、貧困化の過程にある高等教育学歴を有する中産階級においても、言えることである。

(7)そのどちらの場合にも、それはまさに人間の意識の質的飛躍を意味するだろう。

(8)われわれは、まさに<歴史>の新たな局面の始まりに際会することになるだろう。

4.(1)夢を抱こうではないか。

(2)偉大なる感情にではなく、ヨーロッパの経済的力関係の現実を考慮に入れた具体的行動に満たされた夢を、

(3)再び真のエリートとなったフランスのエリートが、その社会的責任を引き受けることを決意し、ヨーロッパという旧大陸の産業と社会組織の全面的破壊を避けるために、保護主義に移行する必要性を確信するに至る姿を想像してみよう。

(4)右派は、国家国民と国土の防衛という考えを供給するであろうし、左派は、ヨーロッパ諸国の不可欠な協力という国際主義的側面を加えることになるだろう。

P315 ~ 317

[コメント]

トッド氏の提唱する「保護主義」とは、とりあえずはイギリスを除くEU全体を視野に入れた保護主義である。まずは自分の足元を固めてからものごとを考えるという意味での保護主義と私は考える。

トッド氏に、先日東京でお会いした際に、私が I'm very interested in your flexible protectionism. と述べたら、にっこり微笑んでおられた姿が忘れられない。

- 2009年10月23日 林明夫記 -